

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月14日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2010～2012

課題番号：22520408

研究課題名（和文） ポライトネスの独日英語対照比較—社会心理学を参照して—

研究課題名（英文） A contrastive politeness research on German – Japanese – English.
With a look at a social psychological approach.

研究代表者

渡辺 学 (WATANABE MANABU)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：00175126

研究成果の概要（和文）：社会心理学の視座を導入した対照言語学の視点から、電子メディアのテキストも参照しつつ、独日英語を素材とする談話分析に主眼をおいた「ポライトネス研究」を構想・推進した。その際、異文化理解の諸問題も射程に収め、「多重モード」や「インタラクション」に論究しつつ、ポライトネス概念のさまざまな差異を明らかにし、異文化コミュニケーションの問題関心も取り込んだ、対照比較研究の意義を示し、近未来の課題を再確認した。

研究成果の概要（英文）：Inspired by the perspective of social psychology and from the standpoint of contrastive linguistics, our project conducted research into politeness which focused on a discourse analysis dealing with German, Japanese and English texts including those in computer mediated communication. We were engaged in analyzing the problems of intercultural understanding and discussed also the problem of multimodality and interaction. Thus, we could clarify differences in understandings of concept “politeness” and show the importance of a comparative study which looks at questions of intercultural communication. Now the project increased awareness of recent and current challenges in this research field.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1500,000	450,000	1950,000
2011年度	1000,000	300,000	1300,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3000,000	900,000	3900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：対照言語学、社会学、言語文化、距離感、インタラクション、位置取り、視点、異文化コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで研究分担者、連携

研究者（後述）と研究会、学会などを通じて緊密に連絡・連携し、専門的討議、意見交換

を重ねてきた。その過程で、とりわけ、デジタルニューメディアのことばとコミュニケーションのあり方を分析・追究する視座の確立に腐心するとともに、いわゆる文化や言語文化を超えて、社会心理学的視点で言語現象を観察し、これに省察を加えることの必要性を強く意識してきた。一方、言語学的なポライトネス研究が従来、主として一言語のみに限定して、たかだか二言語の対照のみで行われてきたという学術研究上の現状を、独日英語3つを視野に入れることにより改善し、獲得された知見によりポライトネス研究に貢献したいと考えて、両名と意見交換を不断に重ねてきた。以上が、研究開始時の様子である。

2. 研究の目的

「対人配慮」と「距離感」をはかるために、社会心理学的視野と方法を導入した対照言語学の視点から、現代・未来のコミュニケーション問題として重要な電子メディアのテキストも対照とし、ドイツ語、日本語、英語を素材とするディスコース分析に主眼をおいた「ポライトネス研究」を新たに構想することを目的とした。その際、言語の多様性の認識にうえに立った変種言語学、ならびにメディア言語学的な視線からの観察、分析、記述を旨とした。

3. 研究の方法

本研究は組織面で、研究代表者（渡辺学）に加えて、研究分担者（三宅和子）ならびに連携研究者（南保輔）の3名で構成された。渡辺は、ドイツ語学、社会言語学、対照言語学、メディア言語学の視点から、主としてドイツ語と日本語（副次的には英語）の言語データの収集、テキストやディスコースの分析に携わり、同時に全体の総括も担当した。三宅は、日本語学、社会言語学、メディア言語学の視点から、主として日本語と英語の言語データの収集、テキストやディスコースの分析を担当した。南は、英語と日本語を主たる対象とし、社会科学、とりわけ社会心理学（と社会学）の視点から、インタビュー、マイクロ相互作用分析などの方法を含む方法的視座の提示と言語学的分析への補完的貢献を行った。作業の全行程において、研究の最新状況の正確な把握が目指されるとともに、人文科学と社会科学の方法（論）の相互参照とそれを通じたデータ分析・解釈の精密化・精緻化が目指された。

4. 研究成果

平成22年度：研究分担者は、8月～10月にロンドンに永住する日本人コミュニティーを対象とする予備調査、ならびにそのデータ化を行った。被験者にはフリートークの形で、自らの言語とアイデンティティー、イギリス人との関係などに関して話してもらい、録音した談話を文字化して分析できる状態

とした。また、ロールプレイに着目しつつ言語学習における「笑い」に着目した研究を行った。研究連携者南は、6月～7月期にスイスにおいて、研究代表者との共同発表を「国際ポライトネス学会」において行った。発表では、ドイツ語圏の研究の要点を要領よくまとめた他、ゴフマンのフレイミングやフッティングなどの概念装置をロボット開発に関する談話の分析にどう生かせるかを検討した。研究代表者は、8月期、ワルシャワにおける国際ゲルマニスト会議のあとドイツのミュンスターに滞在し、図書館で資料を収集するかたわら、ギュントナー教授らとの専門討議を経て、コード・スイッチングやデジタル・ニューメディアを視野におさめたポライトネス研究の可能性を探った。また全メンバーは、12月に三牧陽子氏から日本語談話データを分析対象とする「ポライトネスのバランス探求」についての専門的知識の提供を受け、研究の最前線の一端に触れた。さらに、3月には、代表者がドイツのマンハイムにおいて文献調査を行うかたわら、デッパーマン教授をはじめとする研究者との専門討議によって、英語圏と比べた場合のドイツ語圏の研究の強みは、「視点の置き方(perspectivation)」という概念に見られるのではないかという仮説を立て、「談話の言語学」に力点を置く次年度以降の研究の方向性を一層明確にすることができた。

平成23年度：期間の全体にわたって研究代表者は、昨年度に引き続き談話研究を視野に入れ、異文化コミュニケーションの研究成果をもとにしたうえでの日独（英）語のポライトネス対照研究を推進した。ポライトネス研究をいったん広義に解し、いわゆる異文化理解の諸問題も射程に収めた。

本研究の主眼でもある対照研究は、ポライトネス概念の言語圏、あるいは研究者間の差異を明らかにすることを目指して、「位置取り(positioning)」などの鍵概念とその射程・応用可能性に注目しつつ、最先端の研究成果と対峙しながら推進した。これには、術語・概念の細部の精査とともに、これらを「談話」「コミュニケーション」「インタラクション」などの文脈に位置づける、いわゆるマクロな視座からの読みも必要とされた。10月から12月期、2月から3月期にかけてはドイツ語研究所のシュミット教授のグループのデータ会議に7～8回にわたって参加し、討論にも加わりながら、さまざまな組織（学校、職場など）で収録されたデータの分析・解釈を行い、「エスノメソドロジー」や「解釈学的社会学」の手法に親しむとともに、いわゆる「多重モード(multimodality)」や「インタラクション」の仕組みを理解し、あわせてドイツ語による学術討論の特性を追体験し自己の研究にいかすことができた。社会学、社会心

理学などの方法も援用しつつ、ドイツ語研究所が提供している既存のコーパスを利用、ドイツ語研究所専門研究員との意見・情報交換を重ねたことは、研究上の視野の拡大と調査分析の精密化に役立った。加えて、たとえば11月の招待講演(ドイツ、ミュンスター大学、ギュントナー教授による招待)では、日本と日本人のイメージに焦点を当てながら、ポライトネスの問題にも論究した研究代表者の講演に対して、同教授ならびに聴衆から客観的で批判的なフィードバックを受けることができた。

研究分担者はとりわけ「配慮言語行動」「コミュニケーションのスタイル」に焦点を当て、連携研究者は「社会学」「エスノメソドロジー」に焦点を当てた研究を推進した。10月(山下仁氏「ドイツ語によるポライトネス研究」、熊谷智子氏「謝罪とフェイスワーク ―日本語コミュニケーションにおけるフェイス保持をめぐる一」)と3月の科研研究会(田中典子氏「ポライトネスはどう捉えられてきたか」。3月には、代表者が「社会文体論とポライトネス」と題し、ドイツ語圏に焦点を当てた問題点の概説も行った)においてドイツ語学、日本語学、英語学の視座からポライトネス研究についての専門的知識の提供を得たことは、言語文化横断的な専門討議の機会となるとともに、異文化コミュニケーションにもつらなるポライトネス研究の全体像構築に裨益するところ大であった。

平成24年度:本年度全期間にわたり、研究代表者の渡辺を中心として、ポライトネス研究の最先端を引き続き資料収集・文献調査により追究した。渡辺は、9月にドイツ、マンハイムのドイツ語研究所に滞在し、同研究所のアイヒンガー教授、ケンパー教授、デッパーマン教授など、第一線の言語学者との専門討議を経て、「スタイル」の諸問題とつながるポライトネス研究に課された喫緊の課題を再確認した。やや詳しく言えば、「位置取り(ポジショニング)」における文化的特性の把握可能性とその限界、「視点」の概念に着目することの、異文化コミュニケーション研究における重要性、「ポライトネス」と「位置取り」を関連づけつつも厳密に分けることの必要性などである。研究分担者は、ディアスポラ研究のうち、ポライトネスの視点が含まれる項目に関する面接調査(インタビュー)の文字化作業をとりわけ9月に本研究計画の枠内で行った。連携研究者は、8月と9月に学生団体の活動を観察調査し、ビデオ撮影を行った。結果、リーダーとしての言動と、先輩と後輩間でのやりとりとに「ポライトネス」がどのように表れるかを検討するためのデータが収集された。3月には、いわば全体の総括を兼ねて、早野薫氏に「日本語におけるポライトネスと会話構造」についての、

会話分析とブラウン・レヴィンソンのポライトネス理論を踏まえた専門的知識の提供を受けた。日本語学と英語学の成果を踏まえた報告は示唆に富むもので、ディアスポラ研究、社会学、社会心理学、異文化コミュニケーションをクロスさせた視点から意見交換と討論を行い、ポライトネスをめぐる対照比較研究の意義を再確認することができた。当初計画していた、データ解析・分析を共同で十二分に行えなかったこと、「ポライトネス・ストラテジーの要覧」作成にまでには至れなかったことは反省材料のひとつであり、今後の研究に生かしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

1. 渡辺 学、「異なるものとの交流」としての異文化コミュニケーション」、大野寿子編『超越する「異界」』所収、査読有、勉誠出版、2013年、309-331頁。
2. Watanabe, Manabu: Nähe – Distanz und Politeness-Strategien, in Franciszek Gruiczka (ed.): *Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit*. 査読有、Bd. 12, Frankfurt/M.etc.: Peter Lang, 2012. pp. 277-281.
3. 三宅 和子、「『人間学』としての日本語研究—Yes, Noと対応しない「はい」「いいえ」を手がかりに—」、『鈴木孝夫の世界 第四集』、査読無、富山房、2012年、147~162頁。
4. 三宅 和子、「ケータイの記号・絵文字 - ヴィジュアル志向と対人配慮」、『日本語学』2月号、査読無、明治書院、2012年、14~24頁。
5. Watanabe, Manabu: Wie weit sind die Begriffe *Stil* und *Stilisierung* brauch- und entfaltbar? Ein Plädoyer für die soziospezifische Blickerweiterung im Bereich der Stilistik, 『学習院大学ドイツ文学論集』、査読有、第16号、2012年、67-80頁。
6. Watanabe, Manabu: Zur Tragweite der Kommunikativen Stilistik in transkulturellen und -lingualen Kommunikationssituationen, In: Ryoza Maeda (ed.): *Transkulturalität – Identitäten in neuem Licht*. 査読有、München: iudicium, 2012, pp. 103-109.
7. 三宅 和子、「メディア言語研究の意義と日本語教育への応用可能性」、日本語教育』(150号特集/関連領域の動向と日本語教育)所収、査読有、2011年、19~33頁。
8. 南 保輔、「ロボットラボにおけるコミュニケーション: 意思決定と教育コミュニケーション」、『コミュニケーション

- 紀要（成城大学大学院文学研究科）』、
査読無、第 22 輯、2011 年、1-22 頁。
9. 三宅 和子、「談話の中の「笑い」と話者の内的フットイングースクリプトにない「笑い」の出現を手がかりに」、『文学論藻』85 号、査読無、2011 年 2 月 1～19 頁。
 10. Nähe – Distanz und Politeness-Strategien in: Eva Neuland/ Claus Ehrhardt/Hitoshi Yamashita (eds.): *Sprachliche Höflichkeit zwischen Etikette und kommunikativer Kompetenz*. 査読有、Frankfurt/M. etc.: Peter Lang, 2011, pp. 65-75.

〔学会発表〕（計 5 件）

1. Watanabe, Manabu: 招待講演 Japan- und Japanerbilder. Sprachliche Stereotype als Problem der Interkulturellen Kommunikation, 2011 年 11 月 18 日、ミュンスター大学本部棟講堂、ドイツ。
2. 南 保輔、「ロボットラボコミュニケーションのフレームアナリシス」、日本社会学会第 84 回大会、2011 年 9 月 17 日、関西大学。
3. Miyake, Kazuko: Hairyo-gengo-kodo: A Japanese communicational style. 13th International Conference of EAJIS, 24-28 August, 2011 年 8 月 26 日、タリン、エストニア。
4. Watanabe, Manabu: Nähe – Distanz und Politeness-Strategien, 2010 年 8 月 4 日、国際ドイツ語学文学会議、ワルシャワ大学、ポーランド。
5. Watanabe, Manabu/Minami, Yasusuke: A Social Psychological Study of Japanese Politeness Strategies in Comparison with English. Polite Form and Frame Theory, 第 5 回「ポライトネス」国際シンポジウム、2010 年 7 月 2 日、バーゼル大学、スイス。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 学
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：00175126

(2) 研究分担者

三宅 和子
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：60259083

(3) 連携研究者

南 保輔
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：10266207